



北朝鮮による拉致問題の
パネル展が、県庁1階の県
民ホール（前橋市大手町1

「拉致忘れない」 解決の願い刻む

県庁で啓発パネル展

丁目)で10日、始まった。北朝鮮人権侵害問題啓発週間に合わせて毎年行われており、今年で4回目。拉致問題の経緯や、被害者や家族らの証言、県内の特定失踪者を紹介するパネルなどが展示されている。

今年には拉致被害者の横田めぐみさんの母早紀江さん直筆の短歌6首が展示された。

「消えし子よ 残せるサボテン 花咲けり かく小さくも 生きよと願う」

早紀江さんの著作「めぐみ、お母さんがきつと助けてあげる」のなかにあるもので、めぐみさんの残したサボテンを育てながら、娘を待つ心情を詠んでいる。

「救う会・群馬」の事務局長代理、両宮留香さん(53)は「子どもを待つ、親の切実な思いが伝わる。拉致問題は日本全体の問題。関心を持ち続けてもらいたい」と話す。16日までの午前9時～午後6時(16日は15時まで)。

娘思う気持ち切々

県庁で拉致問題パネル展

横田早紀江さんが直筆短歌

北朝鮮による日本人拉致問題への関心を高めるパネル展が10日、県庁県民ホールで始まった。1977年に拉致された横田めぐみさんの母、早紀江さん(80)が

今回のためにしたためた短歌6首を公開しているほか、問題の経過や拉致被害者一人一人を紹介するパネル50枚を展示して早期解決を訴えている。16日まで。

〈はろばろと睦み移りし雪の街に娘を失いて海鳴り哀し〉

〈朝まだきさえずる鳥の声も哀し子待つ淡き門灯三とせ〉

これらの短歌は早紀江さんの著書「めぐみ、お母さんがきつと助けてあげる」(草思社、99年)から抜粋した。「救う会・群馬 群馬ボランティアの会」の依

頼で、あらためて早紀江さんが色紙に書いた。ある日突然いなくなってしまうまな娘を待ちわびる悲しみが、ありありと浮かんでくる。

救う会によると、最近のファクスでのやりとりでも、早紀江さんら家族が年齢を重ねて苦境に立っている状況が伝わってくるという。

パネル展は、北朝鮮人権侵害問題啓発週間(10〜16日)に合わせ、救う会と県、

北朝鮮拉致問題解決促進議員連盟が主催した。

午前9時〜午後6時(16日は午後3時)。問い合わせは県健康福祉課地域福祉係(☎027・2226・2518)へ。



横田早紀江さん直筆の短歌6首を展示している会場